

亡者の一鐘

私は精神論が嫌いだ。

根性だとか、気合いだとか、そんな不確かなものは信用しないし、当てにしない。例えばスポーツか何か。ゲームでも良い。試合があったとしよう。

血を吐く思いで練習を続けた努力が実り、決勝の舞台まで登り詰めることができた。しかし、その結果は敗北であった。

周囲が敗者である彼の健闘を讀えるつもりで「実力は変わらなかった。どちらが勝つてもおかしくなかった」と称賛の言葉を贈ったとしよう。では、雌雄を決したものは何か？ 精神論で謂うと、実力が拮抗する者同士が競えば気持ち勝ち勝つた方が勝つという。

であるならば、敗者は相手より志が低かったということか？

栄冠を間合いに収める程に修練を怠らなかつた、その敗北者は志が劣っていたのか？

そんな筈はない。

そんなことは断じてないのだ。

そんな無神経・無自覚に放たれる最大限の侮辱を私は許さない。

『認識一つで結果を覆せる』などという、理不尽かつ不条理な言説を私は認めない。

朔夜（さくや）の樹海から帰還した勇者たちは、自室で思い思いに過ごし、海の向こうから日が昇るのを待ちわびていた。

「ふん♪ ふん♪ ふふ、ふんふん♪」

「もう、うたのん。そんなに動いたら洗い辛いよう」

水都がフグフグと歌野の頭でシャンプーを泡立てている。

「ふふっ♪ ソーリー、みーちゃん♪」

だって何も特別なことがなくても、誰かにマイヘッドをウオッシュしてもらえるだけで楽しくなってしまうのに、みーちゃんと洗いつこななのよ？ 全身から止め処無く溢れるこのハピネス！をブロックし切ることなんてできっこないわ！」

注意を受けても、受けたからこそ、より一層大袈裟に喜びを全身で表現して見せた。

「もう、うたのんったら……目、瞑って？」

多幸の海原の底で、水都の言葉に淡い期待が沸き上がる。

二人は互いに向けられている深い愛情を疑うことをせず、自らの胸中に在るものが、戦乱の只中に身を強張らせ、小さく胎動していた幼心の育った姿だということにも気付いている。それを向ける最初で最後の相手が同性だったことにも既に戸惑うことはない。

口にすれば、恐らく相手は受け入れてくれるだろう。

そう心から信じられる程度には、言葉も時間も積み重ねてきたと自信を持って言える。

しかし、そのことを相手に告げることはしない。

伝記・小説・彫刻・絵画・演劇、あらゆる創作物のモチーフとなってきた「恋人」という関係は、きつと世界を滅ぼすほどに刺激的で、世界を生み落としてしまうほどに深淵なものなのだろう。

けれど、二人はそれを必要なものとは考えない。

二人は既に、愛情で紡がれた掛け替えのない関係で結ばれている。

愛情の関係が代え難いものだからと言って、それが至上で最良であるわけではない。「今はまだ、愛情で紡がれた安らぎに浸っていたい」と女子中学生にしては円熟した楽しみ方を心得ている彼女らにとって、性急に求めるものではなかった。

それに、快活に振る舞う歌野であっても、少女チックな関係を求めることには少し気恥しさを感じ、そんな彼女が、自身の乙女心を親友の子孫たちによる策謀に掛かり、擦られ（くすぐられ）たりしたときなどは、とても照れてしまって、どういう顔をしていれば良いのか分からなくなる。

(だから。今はまだ、この若い気持ちには土を被せておきましょう)

愉快で幸福なこの土壌から『土の下に隠れてなんていられない』と芽を出し、莖を伸ばし花を咲かせるまで、白鳥歌野は大切に見守り続ける。

「はい。おしまい」

水受けに浮いた青い期待が、シャワーの熱い湯と共に優しく洗い流される。

キュッとシャワーの栓を閉めて湯船に足を浸けると、冷たい床に熱を奪われていた爪先が、湯に触れてジンッと熱を取り戻し、萎縮していた毛細血管が解放されてゆく。

寄宿舎の湯船は二人で入るには少し手狭なため、歌野が水都を後ろから抱きすくむ体勢を取る。

「ねえ、みーちゃん」

「なあに？ うたのん」

「造反神を鎮めて中立神の延長戦に入ってから、新月って初めてじゃない？」

「そうだっけ？ 気にしたことなかったなあ」

太陽の活動や、月の満ち欠けは生物の活動に強く影響を及ぼす。

海であれば、月齢に従って起こる満ち引きに卵を乗せて沖へと送り出し、また陸であれば、種を植えるタイミングを誤れば穂は実らず、森では月明かりの有無で獣の活動が変化する。天の影響下から逃れる術を持たない人類も例外ではなく、食糧を得るために暦を刻み続けてきた。

電子的に時を刻むようになった現代であっても、天体の動きを見つめることは農業を尊ぶ歌野にとって大事な日常であり、それは私たちが朝の天気予報で雨は降らないと見聞きしていたとしても、実際に外に出て雲行きが怪しくなれば気になって空模様を確認してしまふ様に、とても自然なことだった。

「それでね？ さっきの樹海も真つ暗で、パーテックスだけが青白く発光したり闇に消えたり、中々デンジャーで不気味なバトルだったのよ。」

戦闘中にずっとスマートフォンリーダー見るわけにもいかないし、みーちゃんたちには本当に助けられたわ」

「ふふっ、そうかな♪ どういたしまして♪」

その樹海で友人が一人絶命していたことを彼女たちは知らない。

「もう、ホント大助かりよ！ みーちゃんっ！ ヒシッ！」

歌野が水都を抱きしめて、ワシワシと頭を撫でる。

「わわっ！ ちょっと、うたのん！ 待って！ 待ってうたのん！ ふふっ、撫で方がアグレシッブすぎるよ、うたのん！」

*

湯浴みを終えて、一つの布団で身を寄せ合い『明日は何をしようか』『蕎麦に付けるシヨウガも、シソも良く茂っているし、芋の類もまだまだ取れる』『そういえば、蕪がそろそろだったな』などと、明日の日常に思いを馳せながら白鳥歌野は眠りに落ちる。

——そうなるはずでした。

夜中に玄関の扉が開く音がして『なんだろう？』と目を覚ました私は、隣で寝ていたはずの大切な人の姿が無いことに気付きました。

慌てて外に飛び込むと、闇に向かって舞を捧げる少女の姿が見えます。

月でも出ていれば幽艶で神秘的なものにも映ったでしょう。

けれど、その夜はとても昏く。そこには全ての生き物の意識を海の底に隠してしまつたかのような、巨大で得体の知れない静寂が佇んでいて、霧で良く冷えた空気が、肺から

骨の隅々まで行き渡り、私に対して温かな夢から覚めてしまった少しの後悔と、確かな覚醒を齎しました——。

踊り子の少女の柔らかく繊細な指の隙間から海の結晶が零れ落ち、大地を浄化している。水清ければ魚棲まず、肥やしも過ぎればへドロと成りて水土を腐らす。聖邪・葉毒、二対は本質的には同じものであり、対象への効能があり、有効であれば副作用がある。

「どどどどどうしちゃったのみーちゃん?!

どうして私たちの畑に塩化ナトリウムをスロウインするの!?”

私の命より大切な人が、正気目の目をして、はつきりとした明瞭な言葉を紡ぎ、私の大切な日常を破壊しようとしていました。

彼女が明らかに常軌を逸して、虚ろな瞳で譫言（うわごと）を呟きながら徘徊していたなら：それはそれで酷く心配したでしょうが、ここまで狼狽えることは無かったかもしれません。

彼女の意識は明晰で、可憐な唇から産み落とされる言葉に支離滅裂さは微塵も無く、ただ確かな害意があった。私は怖気（おぞけ）が立ち、理解することを無意識に拒絶するように血の気が引いて、身体の制御を失いました。

「ごめんね、うたのん」

「ソイルは、いやーっ!!」

音も無く這入って来た暗闇は、私たちの心の在り方を土足で踏み躪っていきました。

巫女たちの異変は直ぐに共有された。

勇者御着きの巫女だけでなく、大赦内の巫女たちまでもが、ある日を境に人間を襲い始め、既に10名の大赦職員が犠牲になっているという。

巫女の殆どが非力な女性であるとはいえ、無警戒な背後から凶器を手に徒党を組んで襲い掛かられては一溜まりもない。

現時点で判明していることは、異変が始まった日に奇妙な神託があり、巫女の素養の高いものほど意思の変容が顕著であること。

素養の低いものは元の理性を保っているものの、自身の中の理解不能な衝動を恐れて部屋から出ることができなくなつた。無理に出そうとすると過呼吸を起こすので隔離幽閉対応を取らざるを得ず、神樹様へ捧げる祝詞や舞の儀式も実行不能に陥っている。

元の理性を残す巫女の多くは不眠を患い、少しずつ衰弱しており、解決が長引けば再起不能となる恐れがある。東郷美森を除く巫女の素養を持つすべての人間が『奇妙な神託』によって同時に発症したと推測される。

大赦は、黒不浄を負ってしまった巫女の処遇をどうするか審議中だ。

「若葉さん……大丈夫ですか？　クマが酷いですよ……」

上里ひなたと桐生静が姿を消して一週間が経っており、捜索の間もバーテックスの侵攻が止む気配は無い。

連日勇者部総出で捜索しているが、追跡者を嘲笑うかのように野営の痕跡だけが見つかっている。かつて勇者を見出した上里ひなたや安芸真鈴らが、数多の星屑から逃れながら人々を四国へ導いたように、神託の誘導に従って逃げ果せ（おおせ）ているのだろう。

「杳か……私のことは気にするな……」

そんなことより、ひなたと静さんを早く見付けなければ……」

捜索を続けるために脚に力を籠めるが、自律神経の乱れにより、平均感覚が狂ってしまっていて直ぐに膝を折ってしまう。

「若葉さん、無茶ですよ……！」

こんな、立つのもやっとの状態で、どうしようって言うんですか……！」

「分っている……分かっているんだ……！」　だがっ！

今この瞬間、私が燻っている間にも、ひなたが人を殺めてしまったらと思うと私はっ！

じっとしていたら、気が如何にかなってしまいそうなんだ：」

眉間に拳で杖を突いて、振り絞るように吐露する若葉の顔には、苦悶の表情が浮かんでいる。不眠と心労と過労の三重苦で誰もが疲弊していた。

「落ち着いてください、若葉さん：」

現在大赦は機能不全に陥っていて神樹様の力を高める儀式が行えず、神託も東郷さんしか聞けず、四国中に潜在していた巫女候補者たちによる社会的混乱で町中滅茶苦茶です。

『今の今まで談笑していた相手が突然発症して襲ってくるんじゃないか』『その物陰から、罹患者が自分を殺そうと伺っているんじゃないか』とみんな疑心暗鬼になっていて、私たちも毎日の戦闘と対応に追われて疲労が蓄積しています：

これは明らかに敵の攻撃です。

どんなに心休まらなくても、眠れなくても、それでも休まないとダメなんです：」

幸せな夢の様だったこの世界も、今では、誰にも心を許すことができず、誰も信じることができず、相互監視によって辛うじて規律が維持される巨大な監獄へと墮ちた。

この世界において、試練を受ける立場上発症しないと考えられる勇者たちが、唯一無条件で信じていることができる人間であり、人々が継る（すぎる）対象として政治的にも重要な存在であった。

しかし非常時では、疲れた顔も、不安な顔も、明るい顔も人間の神経を逆撫でる。

情熱的に語れば『煽動家だ』と揶揄（やゆ）され、理知的に論せば『何様だ』と石を投げられる。

そんな場所にノコノコ現れるなど良いのだ。

それでも、誰かが前に立たなければ世が治まらないため、乃木若葉が人々と仲間のために人柱と成り、人類の業を一身に引き受けている。本来その役割を負うべき大赦はというと、失踪した巫女たちの搜索を指揮しつつ、罹患者の隔離軟禁と事情聴取。抜けた人員を補うための再編に、犠牲者家族への資金援助。少しでも神樹の力の減退を遅らせるために、神官らのみで行える儀式をシフト制で1日24時間一刻も途切れさせず奉納し続け、省庁への情報統制もと奔走している。

何より『奇妙な神託』の内容が問題だった。

同時多発的に、世界の在り様の断片がバラ撒かれてしまったのだ。

最初は暴動の影響でナイーブになった人々の妄想だと判断されるだろうが、それも騒乱時に同じ内容の噂が流布され続ければ、不安と極度の緊張状態によって判断力が摩耗した人々の不信感、事件元の大赦へ向くだろう。

最後は行方を晦ませている大赦職員の巫女たちが『真実である』とお墨付きを与えてチエックメイトだ。堰を切ったように四国が怒りに包まれ、大赦の政治機能は崩壊する。

そうなる前に、片を付けなければならない。

「ぐんちゃん…話さなくていいの？」

廊下の影で様子を伺っていた高嶋と郡は、焦燥した若葉に、話し掛けられずに踵（きびす）を返す。

「…言葉が見つからないもの」

神世紀三〇三年一〇月一二日に発生した暗闇の樹海から、氏紙楓の魂は帰らなかつた。

そんな最中（さなか）に起こったこの暴動である。手も頭もとても足りていない。

同時刻、対策拠点。

大赦は、神樹の神託を受ける人間が東郷美森のみとなってしまった現状を危惧し、勇者们を一つの施設に収容することで、予期できない暴徒のリスクを可能な限り排除することにした。

「まさかこの世界で、鎗矢としての力を振るうことになるとはねー…」

「お帰りなさい、赤嶺。 どうだった？」

「風さん、ただいまー。 巫女の訓練を受けていない子達はともかく、シズ先輩たちは全然ダメだね。 見つからない」

対人戦闘に長け、無血で人の意識を奪う力を持つ鎗矢を中心に、弥勒蓮華率いる白組

(日勤)と赤嶺友奈が率いる赤組(夜勤)。そして待機組の3班に分かれて交代で搜索を行っている。

「使えるお金だって限られてるし、そろそろ逃亡生活は厳しい頃合いだと思うんだけど… コンビニやネットカフェを利用してって報告も大赦から無いし、二人ともどうしてるのかな…」

「うーん… 中立神は防人組だけ樹海に呼んだりもできるみたいだし、もしかしたら樹海に

居るのかも：　でも、だとすると見つかってる子達は：」

秋原雪花と乃木園子が、ああでもない、こうでもないと唸っている。

「お帰りなさい、友奈。交代ね」

赤組の帰投の知らせを受けて、白組が簡素な造りの階段を下りて来る。

「ただいま、レンチ。気を付けてね」

互いの拳を軽く打ち合わせて戦友を見送る。

「お帰りなさい、赤嶺さん！　：なんかそれ、カッキーっスね！」

「フフッ♪　ただいま、銀ちゃん♪」

広間には数名の勇者たちが寛いでおり、テレビのニュースからは「*n*市の *n* 高校の生徒が授業中に突然叫び声を上げ、カッターナイフを振り回すという事件がありました。

調べでは、学生は事件直前まで居眠りを：」と無感情に読み上げるキャスターの声が聞こえる。

大赦による情報統制で、個々の事件が『関連する一つの大きな出来事』だと覚られぬよう意図的に共通箇所が伏せられている。

事件の渦中となった地域には通用しないことだが、四国全体で見れば、まだ大事になっていない地域の方が多い。知ったところで、出来ることも無く不安症を患うだけならば、そんな真実は知らない方が良いのだ。

「あっちの友奈たちと比べて、赤嶺はなんだか落ち着いてんね」

「まあ、わたしはね。雪花こそ無理してない？」

「にゃはは。雪花さんは皆ほど純心じゃないし、地元でも色々見てきたからね」

「んー？ ほんとかなあ？」

「ホントホント、雪花さんウソつかない。

…まあ、人間同士の争いなんて見たくなかったけど。みんなが見たくなくて、みんなで見ないようにしてきた危うい世界の実態を突き付けられちゃあね。諦観や覚悟の一つも決まっちゃうってモンですよ」ハハハと苦笑いを浮かべて見せる。

「東郷さんは今日も？」

「うん。今や、唯一の巫女だからね。ずっと瞑想してる」

「結城ちゃんが付きっ切りだから、大丈夫だとは思うけど…ふあ」

赤嶺が口元を隠しながら欠伸（あくび）をする。

「ごめん、雪花。シャワー浴びて寝るー…」

「ああ、ゴメン引き止めちゃって…！ 毎日、お勤めご苦勞様ですにやあ…」

任務中の精悍（せいかん）な面持ちから一転、一步進むごとに「ほてほて」とユルい擬音が聞こえてきそうな赤嶺友奈が出来る上がる。

「ちよつと、赤嶺ー？ ご飯はー？」 「たべるー…」

「誰かー。寝落ちしそうな赤嶺の介抱してやってー。ん？ なぁに、なっつつつつ棗?!」

何者かがエプロンの裾を引くので振り向くと、そこには古波蔵棗が立っており、それはまるで静かに舟を漕ぐ我が子に向けるような微笑みをしていて、力強く風を抱きしめ、風の光り輝く金糸に指を絡めながら何事か耳元で唇を震わせる。

「今日も、明日も、明後日も、私は風を愛している。 ……行ってくる」

「…な、なななななななななっ?! ……*（トク）*…?」

突然の熱い抱擁と、棗にしては特別直接的で情熱的な台詞に瞬間的に発熱し、汗が滲み出て蒸発するに従いゆらゆらと熱気が頭部から白旗を掲げている。

「あーっ、お母さんだけずるーい。 いってらっしゃい、おねーさまっ♪」

「誰が驚天動地の美人ママじゃっ!」

風の目が、頭蓋骨という名の沸騰する金魚鉢から逃れようと虚空を泳ぎ、ツツコミのキレの無さが動揺をありありと表している。

「私は必ず帰って来る。だから留守の間、子供たちを頼む……」

「……ウン………つて……つて！ アンタも悪乗りしないの！」

蓮華たちが待ってるでしょうが、早く行きなさい！ そんで無事に帰って来なさいっ！」
「フフッ。ああ、また後で」

パシンと照れ隠しに棗の背中を叩いて見送る風の胸中は、不安と信頼と幸せと一言では表せない幾つもの感情が折り重なっていた。

「ったく……ぼーっと突っ立ってるだけで、女の子たちにキヤーキヤー言われてた棗が、氏紙君みたいな冗談覚え始めちゃってまあ……」

「んー……風さんごはんまだあ……？」

「ああもう、アンタは半裸でうろつかないの。」

先、シャワー浴びるんでしょ？ 早くサッパリしてらっしゃい」

「はぁーい……zzz」

「ハハ、しようがないにゃあ。ほら赤嶺歩いて」

放っておくと、そのまま廊下で寝落ちしてしまいそうな様子を見かねた雪花が、赤嶺の手を取って誘導する。

「なんか園子の世話してる気分…」

「むにやむにや、よるあれからだあれきさんだー…」「ZZZ」

「東郷の話じゃ精霊の力で溺死はしないらしいけど、一人にして大丈夫かね、こりゃあ…
つぁッ?! ぶなあー……」

階段に差し掛かったところで赤嶺が早々に踏み外し、雪花が手を引いて事無きを得る。

「きたえてるから、だいじょーぶ…ふふ…」「ZZZ」

「なーにが『大丈夫』だいっ！危なっかしくて気が気じゃないよー！」

『心配で、おちおち雑誌も読んでられないな』と、甲斐甲斐しく世話を焼く秋原雪花の姿がそこにはあった。

*

今日の白組の班員は、棗・杏・高嶋・園子・須美と常勤の蓮華を合わせて6名。弥勒蓮華が工事現場の監督さながらに、きびきびと部下たちを仕切る姿が見て取れる。

「点呼！」「1ー！」「2…！」「さんっ！」「4」「5ー！」

「KY（危険予知活動）確認！」

「一つ。不意打ちに備えて、コート等の下は常に変身した状態にいること」

「一つ。想定外、不測の事態は起こるものと思って、人気の無い場所での孤立は避けると」

「一つ！東郷さんの考察によると、精霊防壁は殺傷力の無い攻撃を感知せず、低侵襲性の拷問や洗脳等には対応できていない可能性があります！」

「一つ。少しでも不調や違和感を覚えたら、直ぐに現場を離れて仲間に応援を求めること。致死量に至らない毒物なら通っちゃうかもしれないし、死にはしなくても障害や後遺症が残るかもしれない」

「一つ！……えっと、知らないおじさんに『お菓子あげるよ』って言われても着いて行かない！」

優秀な部下たちの応答に満足して一瞥する。

「今日は公園・コンビニ近くの河原・銭湯周辺を中心に搜索し、昼からは芽吹たちが合流する手筈になっているわ。質問や意見のある者は挙手なさい。……フツ、やはり気付いているようね。この違和感に……」

実際のところ特に何かを察しているわけではない蓮華だったが、誰かが第一声を上げることで会話の切っ掛けとなり、二の手を上げる心理的ハードルを下げる事ができる。たとえ、回答者が現れなかったとしても、それはそれで『自信に溢れた魅力的な自分』を演じ出す要素へと昇華されるので無駄が無い。

自信の演出はカリスマ性や統率力に直結する。勿論口先だけでは不十分で、ハツタリを相手が『起こり得るかもしれない』と信じられる程度の説得性・実現力を備えてこそではあるが、弥勒蓮華が白組部隊長としての資質を振るっていることには違いない。

「ミロ。ヒナたん達が消えてから一週間だね」

「そうね。きつとお腹を空かせているわ」

「いくら人手が足りなくなるとはいえ、未だ大赦がヒナたん達を発見できていないのは異常。女子中学生が商業施設を全く利用せずに野宿を続けるなんて無理なんよ。だからこの現状は、誰かが何処かに匿つてるとしか思えない」

「……！ 大赦が認知していなかった巫女候補者たちによるレジスタンス……！」

「今暴れてる巫女候補者たちも…本当に錯乱しているのかもしれないけど、無意味に暴れてるわけじゃない。きつと煽動で大赦が警戒レベルを上げると引き換えになつてる盲

が何処かにある……それが分かれば、搜索範囲を絞れるはずだよ」

「フッ。流石ね、園子。場所の目星は付いているのかしら？」

「ごめんね……まだ場所までは分らないんだ……」

……でも例えば、水道局や発電所みたいなライフラインで働いてる誰かが罹患してたら」

「いつ都市機能が停止してもおかしくない……！でも、レジスタンスの通信は神託で行われていて傍受もできませんし、初めから攻撃が目的なら取引を持ち掛けることも……」

「目的……中立神の狙いは何なのでしょうか……？やはり、それが分からないことには……」

対ゲリラ戦の基本型は包囲殲滅であり、三要素『素敵（斥候による潜伏地の特定）・ブロック（包囲陣を敷き、敵兵離脱と補給線の封鎖）・殲滅（地道な掃討）』の内、一つが欠けただけで非常に困難なものとなる。

本件に照らすと敵は便衣兵ゲリラであり、目的不明で素敵は難しく、巫女の素質という条件はあっても、選定経路が人ならざる神の手（天命・運命）である時点で無作為選出に等しく、罹患者は四国全土に存在する上、敵味方の判別の付かないこれを包囲することは不可能であり、黒不浄を引き受けられない勇者に人間の殺傷は行えない。

更に言えば、樹海を経由することでレポートの真似事まで可能である。

「フツ、居場所が分からないのなら、誘き出すまでのこと。会議はここまでよ」

「そうだね、レンちゃん。情報が無いなら集めなくっちゃ！」

「タコヤイカのように、柔軟かつ臨機応変に対処しよう」

「そうですね… 今、できることを積み重ねていくしかありませんよね…」

たとえ奇跡的にレジスタンスを一網打尽にできたとしても、巫女たちを元に戻す方法は見付かっていない。目標を神託で知っていたこれまでとは何もかもが異なる今回の試験は、謂わば果ての無い短距離走であり、五〇メートル走であることを願って全力疾走し、五〇〇メートルを過ぎても一向にゴールポストが見えてこない恐怖に足元が覚束無くなるのだ。永久不滅は、条件次第で地獄にも涅槃にも在り様を変える。

伊予島杏と鷲尾須美の濡れた掌が、例年より早めの木枯らしで冷たくなっていた。

*

ところ戻って対策拠点の一室では、常駐者三名が一日の始まりを讃え合っている。

「あつ、こっちに居たんだ。」

おはよう、東郷さん。神奈ちゃん。今日も早いね」

「おはよう、友奈ちゃん。」

友奈ちゃんこそ最近早いんじゃない？ 少し前までは……」

「うーん、朝も夜も暖房が効いてるからなのかなー？ それにね東郷さん！

……ワタクシ結城友奈は、これまでの戦いは勇者の力に頼り過ぎていたのではないかと思つたのであります。

なので初心に戻り、イチから鍛え直さねばならぬと——思いつたのであります！」

「ふふっ、どうしたの友奈ちゃん。話し方が変よ？」

自他ともに結城友奈は勉強が苦手であると評されているが、こと慮ることに至っては、人並外れた感受性と共感力により最善手を導き出す天性の資質があった。

それは神奈が神の視点と時間を積み重ねるごとに、少しずつ希釈され喪失してきたものでもある。

「なるほどね！ それじゃあ、結城ちゃん。今日から私と組手しよつか♪」

「えっ、良いの神奈ちゃん？ もし壊しちゃったら……」

「大丈夫だよ。主任さんが強度試験過程で廃棄にした義体、いーっぱい貰ってるから♪
結城ちゃんは勇者の力を人に向けたくないんだよね？ 一朝一夕で身に付くものじゃないな

いかかもしれないけど、義体の私になら遠慮なく試せるよ！」

神奈は自らの手から零れ落ちてしまった二人の友人に対し、何もしてあげられなかったと悔やんでいた。助けられるとしたら自分しかいなかったはずなのにと、深く後悔していた。罪悪感から激しく自責の念に駆られ『いつそ、後を追うことができたなら』と神奈が考えない日は無い。

「…うん！ よろしくね、神奈ちゃん！」

会話が一区切りして、狙い澄ましたかのように友奈の腹の虫が伺いを立てるので「朝ご飯にしましょう友奈ちゃん」と東郷が手を引き、神奈たちは一旦別れることにした。

（お供えしてもらえれば、食べることはできるけど、そういう気分じゃないからね…）

「ねえ、亜耶ちゃん。水都ちゃん」

現人神―高嶋友奈が、目の前に横たわる二人の友人に問いかける。

「中立神様は、あなた達に何を命じたのかな？」

試練だからって、やって良いことと悪いことがあるよね。そう思わない？」

二人は何も答えない。

「だって、こんなの如何にもならないよ」

二人は何も答えない。

「大本の中立神様が表に出て来ないと、ヒナちゃん達を止められないのに、中立神様はただ静観してるだけでみんなを追い詰めていく…… 楓ちゃんも帰って来ない……」

今この部屋で起きているものは友奈一人であり、友奈の言葉を聞くものも、言葉を返すものもない。孤独が友奈の心を静かに蝕み始める。

「助けられなかった…… タマちゃんも…… 杏ちゃんも…… ぐんちゃんも……」

私って……いつも肝心なところで一步を踏み出すのが遅くて、取返しが付かなくなってから後悔するんだ…… この世界で、またみんなを失うのかな……？」

冷たい義体の身体には涙を流す機能が無く、出口を失った辛苦を含んだ涙は、楓が抜けた心の穴にすべて流れ込み、蟠って（わだかまって）澱みを作ってゆく。

「いやだよ、神樹様……」

みんなが傷付いていくのを黙って観てるだけなんて、私にはできないよ……」

しじまに包囲され身動きが取れなくなつた友奈は、膝を抱えてしとしと心を泣き腫らす。複数の文脈が互いを無視したまま干渉し合い、纏れ（もつれ）合い、巻き込まれたもの達を次々に吊し上げていた。

彼女の『神の心を知る』という試練もその文脈の一つであり、神智・神力を持つが故の無知と無力と不自由を痛感している。

「できることしかできなくて、何もできなくなつて：私はどうしたらいいんだろう：」

知識は理を越えられず、力は力によって奪われる。

審判の日は近い。

寒くも熱くもないこの『安置室』は、ものを考え過ぎるには適した薄暗さと静けさを兼ね備えていた。しかし物言わぬ少女たちを眺めていると、まるで『死体を収容する安置室』のようにも見え、昔々の、爪先が擦れるだけで苦しくて心臓が潰れそうになる記憶が引き摺り出される。神智を備えている彼女には、例えそれが300年前の出来事であろうと無関係に、全て、たった今起こつたことのように質量のある体験としてフラッシュバックする。

そんな苦行を続けてきた彼女も、もうじき解放される。

もう一人の友奈は、たっぷりと注がれたお湯から立ち上る温かい湯気に囲まれ微睡み（まどろみ）、白い霧の中では、焼けた小麦色の卵肌が艶々と瑞々しく光を反射していた。「さすがにレンチには負けるけど、雪花の技術も侮れない」

「いやまさか、服を脱がせるところから私がやることになるとは思ってなかったよ…」

秋原雪花は千鳥足の赤嶺を無事に送り届け、そのままの流れで湯浴みに付き合うこととなり、正面に座るその人の頭をシャンプーで泡立てながら御座なり（おざなり）に抗議の声を上げる。

「えー？ 自分から巻き込まれて来てた気がしたけどー？ あっ、ツンデレだ？」

「ツンデレで…夏凜じゃないんだからさー。せめてクーデレとお願いなさい、クーデレとー」

「アハハッ♪ デレは認めるんだ？ わたし雪花のそういうところ結構好きだなー」

「はいはい、そりゃどーも」

赤嶺の押揃い（からかい）には一切動じず、桜色の髪にリンスを馴染ませていく。

「……ねえ、そんだけ意識はつきりしてるなら、わたし手伝わなくてよかつたんじゃないな

い？」

「そんなことないよー？ つれないな！。」

……だって、ここくらいしか監視の目を逃れられる場所が無かったからね」

赤嶺の雰囲気が一変する。

「ねえ、雪花。もし雪花が人類を滅ぼそうとする神様で、巫女素養者全員の意識を自由にコントロールできるとしたら何処を狙う？」

「…なにさ藪から棒に」「いいから」

雪花の脳裏に、北海道で見てきた大人たちの姿が浮かぶ。

「まあ…先ず大赦は陥落させるよね。獅子身中の虫っていうかさ。」

折角、敵戦力の中枢に好きなかだけ間者を送り込めるんだから、私なら徹底的に潰すよ。

できるなら政治的に無血で掌握したいところだけど、最高権威が世襲制じゃあ、ちょい

難しそう…だし…ね…？……………えっ…なにこれ気持ち悪い…」

敵の動きを頭の中でトレースしてみても、現状の異常さに気付く。

「そう。覆しようのないアドバンテージが中立神にあつて、実際既に私たちは詰んでい

る。なのに、未だこの場所が制圧されていないのは『おかしい』」

悪い予想に雪花の目が大きく見開かれる。

「誰かが罹患してることを隠して潜伏してる：!? まさか東郷!?」

「…可能性はあるだろうね。」

勿論一人だけとは限らないし、むしろ一人なわけ無いって思ってる」

「ひなた達が見付からないのも、そりゃそうだわ： 大赦が既に敵の手中なら、どうにでもできちゃうじゃない……………」

うわ：どうしよ、やばいこれ、中立神の動きが不気味過ぎて生きた心地がしない：！」
自分たちの殺生与奪が敵の思うがままな実情を理解してしまい頭を抱える。

「神樹様と連携してるからできることであって、さすがに天の神も真似できないだろうし、あくまで試練することなんだろうけど：胸先三寸で生かされてる感じだよー：！」

悪寒を取り除こうと湯船に浸かってみたが、冷や汗と普通の汗が混じる不快感に顔を歪ませてしまう。

「まあ、できてたら、とっくに人類滅亡してるしね：つまり今度のは人類の自滅対策か：そのために洗脳で人の意思を振じ曲げるとか、内地の神様は滅茶苦茶やるわぁ……………うちらんとこじゃ、神様だろうと悪いことしたらテネポクナモシリ行きだっちゅーに：！」

「ふああ……結構長湯しちゃったから先上がるね」

「あ、待って、この話知ってるのって」

「今はまだ、私たちと芽吹とシズクだけ。千景にも話しておきたいけど、高嶋先輩がいつも一緒だから連れ込む隙が無いんだよね」

「連れ込むって……（つまり、あれは演技だったわけね……）……はいさ、了解」

赤嶺の姿が見えなくなっても、浴場の引き戸はガラガラと自重で暫く動き続け、終いにカシャンと一声上げて沈黙した。

今この空間には視野の内ではびよこびよこ跳ねる赤嶺の姿も、誰かが熱いシャワーで汗を拭う音も、お湯が垢と共に排水溝に落ちて弾ける音も、心地良い笑い声もありはしない。気紛れにザブンと水を打ち上げてみたり、バチンと水面を叩いてみても、ついさっきまでの賑やかさが嘘のように掻き消えていて胸中の騒めき（ざわめき）だけが大きくなってゆく。

「んー……まいったにゃあ……要するに『隠密行動で謀略を防げ』ってミツシヨンっしょ……敵さんに感付かれたら即アウト&コンティニュー無しとか、無理ゲーにもほどがあるっ

て……そもそも脳筋尽くしの勇者部から、ブレイン役の巫女取り上げといて「頭脳戦仕掛け」とかさあ……」

二本目の文脈は、勇者たちに人の可能性を見た誰かが与えた『人類への試練』。

神に見初められた神子（特別な存在）などではない、本当の意味での有象無象たちへ課せられた試練であり、力による平定が不可能な舞台が設定されていて、これまでの遣り方では突破できない。

これもまた一本目と同様。力の無力さを知らしめる構造をしている。

力は力でしかなく、理は理でしかなく、神も神でしかなく、人も人でしかない。

何者も己の領分以上のところには手が届かず、届かないと諦めても、届けと願っても

『届かない』という身も蓋もない事実は変わらない。

それでも手にしたければ、方法は三つ。

「ああん、もうっ……！　こんなの、どうしろってのさー?!」

*

楠芽吹たち防人組は、連帯感をより高めるために個室を使わず全員一つの部屋で寝起きすることにしており、今は先発隊の連華たちに合流すべく身支度を進めている。

「ねえ、メブ：私達これからどうなっちゃうんだろう…」

いつも以上に不安そうな加賀城雀が芽吹に尋ねる。

「今は巫女たちを元に戻すことだけ考えていればいいわ。」

そんなことより、早く支度しなさい、雀。先に外で待ってるわよ」

重い玄関の扉が、ガタンと音を立てて閉まる。

幾ら芽吹が犠牲者ゼロを掲げていても、四国全土に潜伏するゲリラから全ての人間を守り切ることなど不可能。抵抗できない身内に手を出した卑劣な神に憤り、眠り続ける亜耶に何もしてやれない自らの無力に怒り、いつかの勇者部で雀が出した不謹慎な問いかけを吐りつけた自分が、実質的に命の選別を行っている現状の矛盾に、楠芽吹は腸（はらわた）を煮え滾らせていた。

「絶対に許さない…！」

太陽に隠れて見えない中立神の象徴を無意識に睨みつける。

「気持ちには分かるが、ちったあ、落ち着け。ブチギレ時を見誤ると足元掬われんぞ」
数分目を閉じていた間に出て来たのだろうか、直ぐ傍の壁に山伏シズクが寄りかかっ
いた。

「シズク：それは経験談かしら？」

芽吹を押し飛ばし **バンツ**！と、大きな音を立てて玄関扉に手を打ち付ける。

「な?!」**楠**「テムエ：本当は自分でも分かってんだろ？」にを…」

心臓が早打ち、真っ直ぐ見つめてくる鷹の様に鋭いシズクの視線から目を逸らせない。

「直ぐそこに居た俺の存在に気付けねエ。」

間合いに入られても反応できずに壁ドンされる。

亜耶が居ねエで、イライラの処理ができずに周りに嫌味を言っちゃまう。

いつもの無駄に合理的なテメーなら、そんな情けねえツラはしなかったぜ？」

以前にも似たようなことがあった。

あれは確か、ゴールドタワーで防人の任に就いていた頃……

(シズクの言う通りだ：…こんなことでは、亜耶ちゃんを助けるどころか…っ！)

仲間を悪戯に危険に晒すばかりか、自分の身も満足に守れやしなない：!!)

覚悟も矜持も容易く理不尽に踏み潰され、芽吹の瞳から悔し涙が一筋流れる。

「こんな…っ！　こんなはずじゃ…！　どうして亜耶ちゃんが…!!」

——あの日、亜耶は、就寝中の芽吹の部屋に合鍵を使用して侵入し、何処で入手したのかポリタンク二つに詰めたガソリンと軽油を撒き、自分諸共芽吹を殺す気で火を放った。不幸中の幸いか、亜耶は神事のつもりだったらしく、正装で犯行に及んでいたため、耐火・耐熱・断熱力に優れた羽衣の力で惨事は免れた。

気化炎上したガソリンが爆発的に膨張し、猛火となつて、ポリタンク移送に使用したと思われる台車を吹き飛ばし窓を粉碎。フロアマットから一瞬でカーテンや壁紙、棚のプラモデルに燃え移り、悪意を持って部屋を喰い尽くさんとする炎の海に呆気にと取られていた芽吹が、火災報知器の音で現実に取り戻されて消火活動を始める。しかし、既にガソリンの炎によって発火点に達している軽油が水に浮いて炎上し続けた。

寝起きでなかったとしても誰も軽油の存在には気付かなかつただろう。撒かれたのが気化速度の速いガソリンだけで、且つ、すべて気化済みだったなら多少の役に立ったかも知し

れないが、火の点いた軽油に水を掛けてしまったことで却って火の手を拡げてしまった。事件のあった部屋の辺りは、今もなお生々しく火災の爪痕を残しており、関係者以外の立ち入りが禁じられている。

「許せねえよな…… 悔しいよな…… 人様の頭ン中、好き放題弄くりやがってよ……」

楠を肩で抱いて自らの怒りを静かに紡ぎ出し、芽吹は言葉にならない感情を強く抱き返すことで答える。ギリリと歯を食いしばるシズクの眼光は義憤と決意に満ちていた。

「だけどよ。だからこそ、俺たちは怒りで我を見失っちゃなんねェンだ。」

いつでもマジの全力全開で、クソつたれの神様をぶっ飛ばせるようにな……」

「ありがとうシズク…… 目が覚めたわ……」

「へっ、良いってことよ。リーダーが寝惚けたこと抜かしてやがったら、ソイツを叩き起こすのが部下の役目ってモンだ」

抱擁を解いて相對し、不敵に微笑みかける。

「シズクが前後不覚になったときは、楠が助けてあげてほしい」

一瞬だけ元人格のしずくが現れて、直ぐにシズクに戻る。

「最近シズクと話すことの方が多いわね……任されたわ、しずく」

「何をなさっておいでですの、雀さん？ ……あら？ 扉が重「ちよつ待って弥勒さんいま」

「——これしきつ、ですわー！」

「きゃっ!?」「うおっ!?」

勢いよく背後の玄関扉が開き、突き飛ばされてシズクを地面に押し倒してしまう。

「だ、大丈夫シズク?! 頭とか打ってない!?」

「痛ッてえなクソツ……!」

「あわわわわ、だから私、待ってって言ったじゃん！ 弥勒さんのおバカ！ 突撃脳！」

「グハツ！ わ、わたくし、まさか扉の前に人が突っ立ってらっしゃるなどは、つゆと

も思わず……そのう……お頭は大丈夫ですか?」

「。ア。ア。ツ!?」

「ハツ!? ちち違いますのよ?! わたくしはただ、純粹にシズクさんの身を案じて……」

「ごめんなさい……」

弥勒夕海子が、しおしおと頭を下げる。

「……たく、別に構わねエよ。元を辿りや、俺が玄関を塞いでたのが悪イ」

「ですが、わたくしが雀さんの制止を素直に聞き入れてさえいれば、起こり得なかった事故……本当に何処もお怪我は有りませんか……?」

シズクが立ち上がり、パンパンと服に着いた砂埃を払う。

「心配し過ぎだ、弥勒。そもそも、俺がテメエの不意打ち如きに後れを取るかっつてんだ」

「……あれ、シズクってこんな聞き分け良かったっけ? やっぱり打ち所が……」

「ドヤされてエみてエだな!! 加賀城!!」 「ひぎゃあ?! 調子乗りましたごめんなさい許して
離してシズク大慈悲菩薩様!! 痛い痛い頭が割れるウヴ ア ア ア ア ツ!」

首に負荷を掛けないよう丁寧に、ヘッドロックで雀の鱗谷（こめかみ）を締め上げる。

「懲りませんわね……雀さんも」

「うっ。うっ。うっ…… まだ痛みが引かないよう…… よしよしして、メブら……」

雀が甘えた声で愛撫（あいぶ）を希望するが、芽吹はこれを「はいはい」と右から左へ受け流し、最終的に弥勒夕海子がそれを引き受ける。

「ヴウツ…みんなのわたしへの優じさが足りないよお……………氏紙さん…うじしさんつ、早く帰ってきてよお……………」

「…死んでも死ななかつた、あの方のことです…」

心配なさらずとも、お勤めを全うして、また高笑いを上げながら帰って来ますわよ。

離れている時間が愛を育むとも言いますし、少しの辛抱ですわ、雀さん…」

そう言つて頭を撫でて宥める夕海子と雀の間には、隔絶した認識の齟齬があつた。雀

には、今この瞬間にも楓が取り返しの付かないところに行つてしまふのではないかと、心配で不安で仕方が無く、夕海子はそもそも楓が脳死しかけていたことさえ知らない。

そんな、それぞれの心の内を知らない芽吹の視界では、自分たちの欠点や弱さを互いに補い合う素晴らしい仲間・友人たちが戯れており、実態とは少しずれた感慨に浸つた視線を三人に送っている。

（待っていて亜耶ちゃん。必ず私たちの手で貴女を取り戻すから…）

「そういえば、お二人で何を話していらしたんですの？」

シズクは自分の吐いたクサイ台詞を。芽吹は不覚にも壁ドンで泣かされてしまったことを思い出し、頬を染めて即座に「何でもない」と誤魔化すので、一部始終を扉越しに立ち聞きしていた雀が、「（これはこれはこれは、メブとシズク同時に恩を売りながら、弱みまで握るチャンス！ この殺伐とした社会不安の中、歩けば棒に当たって死に、風が吹けば桶が頭に当たって死ぬ、私みたいな弱いチュンチュンが、チュン死に一生を得るための活路は今まさにここっ！）」と目に光を宿して「まあまあ、そんなことより弥勒さん。急がないと蓮華さん達が待ち惚けだよお？ 急いだ方が良いンツじゃないかなあ〜？」と誘導を試みた。

「ああっ!? だからこそ雀さんの制止を振り切りましたのに、このままでは遅刻してしましますわ！ 芽吹さん、雀さん、シズクさん、お急ぎあそばしましてっ！」

一目散に駆け出す弥勒たちの背中を見送り「いやー、弥勒さんは単純で助かるなー♪」と満足の雀。芽吹とシズクに『街中で通り魔に襲われないように私を守ってね♪』と交渉しようとする振り向くが、そこには既に影も形も無く――

「つて、ホッコリしてる場合じゃないよ！ 私だけ遅刻したら、今度は何だかんだでメブに怒られる…！ 待って、みんなあああ！」

常に怯えている雀はいつも大きな声を上げて泣き叫び、感情を吐き出し続けている。

これは彼女が不安を溜め込まないことに繋がっており、加賀城雀の怯え続けた人生が、怯えたまま、不安に浸かったまま平常心を保つという得難い術を獲得し体現していた。

加賀城雀を死に至らしめる真の恐怖は、きつと声を奪われた先に待っているのだろう。